

2015 年ミラノ国際博覧会の視察

B I E（博覧会国際事務局）事務局長との意見交換

報 告 書

大阪府政策企画部企画室

9月10日(木)

■2015年ミラノ国際博覧会 日本館主催見学ツアー

◇場所

2015年ミラノ国際博覧会 日本館
(Lot No.43 EXPO,VIA PISACANE 1-20016 PERO MI ITALY)

◇出席者

松井知事、中谷秘書課主査、露口企画室副理事、森政策課参事、長畑政策課課長補佐、
中井国際交流監、藤澤国際課課長補佐

【他団体】大阪市 村上副市長他 4名、大阪市会 東議長他 7名、
大阪商工会議所 佐藤会頭他 28名、大阪観光局 野口専務理事他 2名、
ミラノ市副市長、在大阪イタリア総領事

【アテンド】加藤 日本館政府代表

◇訪問概要

①日本館について

- ・幹事省：農林水産省・経済産業省、副幹事省：国土交通省
- ・参加機関：日本貿易振興機構（JETRO）
- ・館長：小林浩人氏
- ・敷地面積：4,170 m²（パビリオン最大級）（別紙パンフレット参照）
- ・日本館出展テーマ：「共存する多様性」（Harmonious Diversity）
- ・日本館のメインメッセージ：

「日本の農林水産業や食を取り巻く多様な取り組み、「日本食」「日本食文化」に詰め込まれた多様な知恵や技が、人類共通の課題解決に貢献するとともに、多様で持続可能な未来の共生社会を切り拓く」

- ・ジェットロや報道によると、日本館の人気は非常に高く、開催3か月間で来場者が100万人を、9月17日時点で150万人を突破。入館は100分以上待ちの状態

②視察概要

- ・各館が趣向を凝らしたパビリオンを建築しているのに対し、日本館は間伐材を使い、釘を使わない工法で建物を囲うように格子を組み上げているのが独特。日本の食文化を支える森林と水源を守るために、間伐が重要であるということを日本の伝統技術を駆使して表現されている。
- ・館内の各ブースも非常に特徴的。
まずは、世界の食文化を認め合い、課題を共有するとともに、日本の取り組みや環境に配慮しバランスのとれた食文化をアニメなどで紹介するブース(SceneⅢ)。ブースの終わりに設置されている地球儀で地域を指差せば、その地域の課題と対応策が映像で流される。座ってじっくり観覧できるようこのブースのみ椅子が配置され、意識啓発に最も力を入れていると感じた。アニメでは、2005年愛・地球博のキャラクターが使用され、国際博覧会の理念が継承されていることもうかがえた。



- このほか、最新のセンサー技術を使用して昔ながらの水田を表現し、そっと浮き草に触れれば波打ち魚が泳ぐ映像が流れるブース(Scene I)、滝に見立てた円筒の上部から流れ落ちてくる日本食のレシピの画像を指でなぞって自分のスマートフォンにダウンロードでき、たくさんの海外の方がダウンロードされていたり、様々な食材からいろいろな料理ができるという日本食を紹介するブース(Scene II)、箸を使うタッチパネルで日本の礼儀作法と懐石料理を体験するブース(Scene V)など、最新技術を駆使しながら、参加体験型で、教育的要素、世界的課題の共有、日本の食文化の紹介をしている。(別紙「ミラノ万博日本館のご紹介」参照)

(Scene IIにて 加藤日本館政府代表の説明受)



(Scene Vにて 箸を使ってタッチパネルを操作)



■大阪市主催事業「姉妹都市大阪から魅力発信～Buon giorno da OSAKA!」 オープニングイベント

◇会場

2015年ミラノ国際博覧会 日本館 イベント広場
(Lot No.43 EXPO,VIA PISACANE 1-20016 PERO MI ITALY)

◇出席者

松井知事（来賓、鏡開きの掛け声）

【他団体】主催者：大阪市 村上副市長

協力者：大阪商工会議所 佐藤会頭、鳥井副会頭、小嶋副会頭
大阪観光局 野口専務理事

ミラノ市副市長、在大阪イタリア総領事、在ミラノ日本総領事

その他来賓：大阪市会議長、他大阪市会議員7名、橋爪府市特別顧問

◇大阪市出展概要

【テーマ】姉妹都市大阪から魅力発信～Buon giorno da OSAKA!～

【出展期間】平成27年9月10日（木）～9月13日（日）

【出展内容】大阪の「食」と「観光」の魅力を発信、
大阪市とミラノ市の姉妹都市交流の歴史等を紹介

◇イベント進行

1) 出演者（来賓）紹介・登壇

（村上副市長、ミラノ市副市長、在大阪イタリア総領事、在ミラノ日本総領事、
松井知事、市会議長、大商会頭、大阪観光局専務理事）

2) 主催者あいさつ（村上副市長）

3) 来賓代表あいさつ（ミラノ市副市長）

4) 大阪ミラノ姉妹都市交流親善大使紹介(4団体)

5) 鏡割り(両副市長、在大阪イタリア総領事、在ミラノ日本総領事)

⇒ 発声 松井知事

6) 振る舞い酒

(サントリーハイボール)、
ショートパフォーマンス

ボンジョルノ！ 大阪府の知事の松井でございます。
このたびは、大阪市の出展事業のオープニングおめでとうございます。ミラノ万博を通じて、食や観光をはじめとする大阪の都市魅力を世界に発信し、さらに、多くの方々が大阪に訪れていただく、そういう契機になればと期待いたします。
みなさま、日本館の中で日本の食を目で見て楽しんでいただけたと思いますけれども、その味を感じていただかなければ（本当に）楽しくありません。日本館の中のさまざまな食の魅力が、大阪にはすべて揃っておりますので、ぜひ、この日本館で感じられた、目で見られた食を実体験しに大阪に来ていただきますように。十分なおもてなしの用意をして、お待ちしております。
それでは、準備も整いましたので、私の合図で鏡を開いていただきますよう。
(以下掛け声 よいしょ、よいしょ、よいしょ！)



■ミラノ国際博覧会 パビリオン視察(UAE館⇒カザフスタン館⇒イタリア館)

◇会場

2015年ミラノ国際博覧会内
(VIA PISACANE 1-20016 PERO MI ITALY)

◇出席者

松井知事、中谷秘書課主査、露口企画室副理事、森政策課参事、長畑政策課課長補佐、中井国際交流監、藤澤国際課課長補佐(橋爪国際博覧会大阪誘致構想検討会座長同行)

◇視察概要

《UAE館》

- ・2020年国際博覧会開催国
- ・パビリオン全体が砂漠、砂丘をイメージして作られている
- ・視界最大170度のスクリーンで上映される8分間のショートムービーが、水や食の大切を物語仕立てで訴え



- ・パビリオンのつくりが非常に特徴的。砂漠の砂をイメージした白い地面に褐色のパビリオンが建ち、手前には、川の水が流れるようにクリアブルーの展示キャビネットがカーブして並んでいる。
- ・館内の大型スクリーンに映し出される映像は、現代の子供が砂漠しかなかった過去にタイムスリップし、水やヤシの木の大切さを思い知らされる場面、また、急ピッチで開発が進む中、切り倒されそうなヤシの木をヘリで安全な場所へ移送する場面もあった。
- ・砂漠の国ならではの、水や植物の大切さとともに、UAEの開発は自然に配慮しておこなっているということの訴えを、建物やプレゼンテーションから発信していた。



《カザフスタン館》

- ・2017年アスタナ万博の開催国
- ・砂絵アートの実演、3Dシアターのメインショーが人気
- ・正面ステージでは連日伝統的な音楽等のパフォーマンスを披露

- ・最初に砂絵の実演によるカザフスタン国の歴史、文化の紹介。視察当時はおこなわれていなかったが、民族舞踊の実演も行っているとのこと。



- ・次に、カザフスタン国の主要農水産物の紹介。カザフスタンが原産地であるリンゴの木、水槽には養殖チョウザメ、馬乳の試飲など。同室内の中心には環境問題となっている砂漠化のマップがあり、自国の食文化と、これを揺るがしかねない問題を同時に表現。
- ・最後に、これまでとは違って最新技術を駆使した体感式3D映像による紹介となり、光を反射するパビリオン建築と相まって、近年急速に経済成長しているその勢い、次回2017年アスタナ国際博覧会の開催国としての積極的な姿勢が感じ取れた。



《イタリア館》

- ・会場内パビリオン最大
- ・会場を南北に延びるカルド通りの北端に位置し、隣接するシンボルタワー「生命の樹」とともにミラノ国際博覧会のシンボルとなっている
- ・最も人気の高いパビリオン

○イタリア館到着次第、同館側から意見交換の申し出があり、急きょ開催

【府側出席者】

松井知事、中井国際交流監
 (橋爪国際博覧会誘致構想検討会座長、
 ロンバルディ在大阪イタリア総領事同席)

【伊側出席者】

ファブリツィオ・グリッロ (ミラノ国際博覧会公社事務局長)

フランチェスコ・ロッレリ (ピアチェンツァ県知事)

パオロ・ドージ (ピアチェンツァ市長)

エリザベッタ・ヴィルトゥアーニ (Bloomet s.r.l./旅行マーケティング企業の社員)

※ピアチェンツァ県 (県都はピアチェンツァ市)

ミラノ市が属するロンバルディア州の南側に隣接するエミリア＝ロマーニャ州に属する。



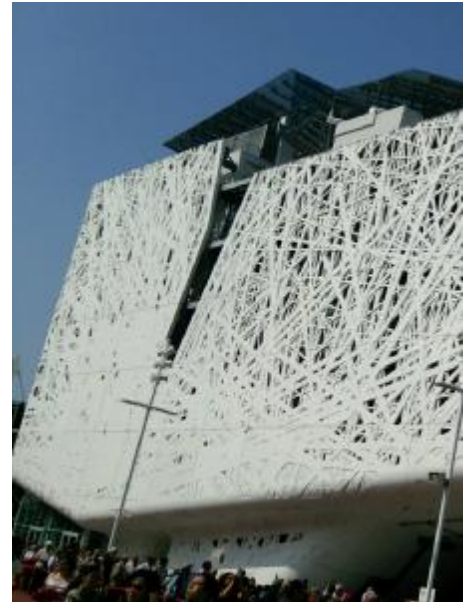
(意見交換内容)

- ・ピアチェンツァ県・市において、日本・府との交流(観光、企業進出等)を希望している模様であり、同県から松井知事に日本語による観光案内冊子が手渡され、要請を受けた。
- ・松井知事から、府内への企業進出にあたっては、ローカルタックスフリーとなる特区制度等の優遇制度を紹介し、互いに交流を深めることで合意。



○視察概要

- ・真っ白の巨大なパビリオンの壁はリサイクル素材で、光触媒コーティングの作用によりクリーンな空気にする、天井には太陽光発電ガラスを貼りつけていると聞き、究極のエコパビリオンと感じた。開催国として、国際博覧会の基本理念である環境配慮への取組は随一。
- ・館内の全面ガラス張りブースは万華鏡のよう。(急きょ意見交換が行われたため館内視察はほとんどできなかった。)
- ・隣接の企業館では、最新技術を駆使した未来のスーパーマーケットがあり、安全な食の確保のため、食材を手にするだけで生産地や栄養価、レシピまでも前面モニターに表示されるとのこと。



↑ パビリオン・ゼロ館
(コンセプト館)



↑ イタリア館(左)とシンボルタワー(右)



↑ メインストリート (南北)



↑ メインストリート (東西)

9月11日(金)

■BIE(博覧会国際事務局)事務局長との意見交換

◇場所

B I E事務局 (パリ市内/34, Avenue d'Iéna, 75116, France)

◇出席者

【府側出席者】松井知事、中谷秘書課主査、露口企画室副理事、森政策課参事、
長畑政策課課長補佐、中井国際交流監、南国際課主事、
(宮本在仏日本大使館一等書記官同席)

【BIE側出席者】ヴィセンテ・ゴンザレス・ロセルタレス 事務局長 他4名
(Vicent Gonzalez Loscertales)

≪B I E (博覧会国際事務局)≫

国際博覧会の常設の事務局で、申請の受付や承認などを行う国際組織。略称 BIE。1928年に締結された国際博覧会条約 (BIE 条約) に基づき同年に設立された。本部はパリ。一般に万国博覧会とよばれる国際博覧会を開くためには、開催希望国の政府が BIE に申請し、総会で承認される必要がある。日本は 1964 年 (昭和 39) に BIE 条約を批准、翌 1965 年に申請が受理され、1970 年に日本万国博覧会 (大阪万博) を開催。

≪国際博覧会に関するロセルタレス氏の主張≫

- ①博覧会とはバーチャル・リアリティの対極にある。
- ②博覧会は通常のイベントではなく、商業見本市でもない。
「世界が集う唯一の場所」と位置づけている。
- ③国際社会が、平和と協力をもって団結できる唯一の方法が多元主義であり、博覧会はこの多元主義を用いて多様な国々をまとめ上げ、世界に平和をもたらそうとしてきた。(2005 年愛・地球博での事務方責任者 宮本武史氏による)

◇知事の発言要旨

<大阪開催の検討報告、開催テーマ>

- ・1970 年の大阪万博開催から約 50 年になる。世界が抱える課題を解決する新たなイノベーションを起こすような国際博覧会を開催したいと考え、検討中。
- ・「超高齢社会において、いかに豊かに生活ができるか」「心とからだの健康をどのように保つか」が大きなテーマになると考えている。

<他国の動き>

- ・2025 年開催には、パリなども立候補すると聞いている。
大阪はこれらの都市と競えるか。

<今後の進め方>

- ・日本の中で、2025 年開催の意義を丁寧に説明し、コンセンサスを得る必要がある。



◇BIE事務局長の発言要旨

<開催テーマ>

- 万博の意義は、経済の観点も重要であるが、人々の日常生活をよくする目的がなければならない。
- 知事が考えているテーマは、万博の意義を踏まえている。「健康」は人類の未来にとって重要なテーマ。これまで「健康」をテーマにした国際博覧会はなく、日本はこういうテーマを打ち出せばよい。
- そして、国固有の文化や価値観に基づいて課題解決への道筋を示し、他国と共有することが求められる。

<他国の動き、大阪への期待>

- 2025年国際博覧会開催は、パリ、ロンドン、ロッテルダムに加え、トロントも候補になる可能性がある。
- 相手はすべて大都市であるが、大阪は競い合えるだけの力がある。日本は、ナショナルプロジェクトとなれば、皆が一丸となって実現しようとする。他の国ではありえないこと。

<今後の日程、手続>

- 公式な候補の表明は、開催の9年前から可能であり、最初の候補表明があって半年後に受付を締め切る。例えば2025年4月から開催するならば、2016年4月から表明が可能。
- 表明は、意思表示に加えてテーマと期間を示した一通の書簡でよい。翌年夏の終わりくらいまでに詳細を提出すればよいので時間は十分にある。

<協力表明>

- 今日は3つの良いことがあった。①国際博覧会を開催したいという思いを聞いたこと、②ここまで足を運んでくれたこと、③今後真剣に検討していくとのこと。いつでも力になる。互いに協力を。



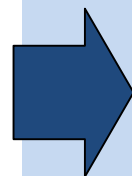
ミラノ国際博覧会の視察を通じて感じた地元企業・経済での効果

2015年ミラノ国際博覧会での具体例

地元企業・経済での効果

直接効果

- ・イタリアのコーヒーメーカー「illycaffè」他 27社がミラノ博の公式パートナーに
- ① 公式パートナーは企業パビリオンに出展
- ・ミラノ博日本館では、各自治体が順に地元産品等をPR



開催国・地域の関連産業、パビリオンへの出展企業が世界に発信(包括的なテーマ設定から関連産業の幅は大きい)
⇒ 企業イメージの向上、取引機会の拡大
関連産業のほか、周辺産業へも波及

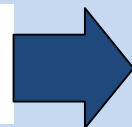
- ・各パビリオンでは、先端技術を駆使した展示や体験施設を出展
- イタリア: 未来のスーパーマーケット(食品の成分自動表示等)を展示、ワインの保存技術をPRなど
- 日本: タッチパネルによる日本食体験、スマートフォンを通じた日本食レシピの紹介
- ② 国際博覧会公式HPのほか、在日伊商工会議所、UNIDO(国際連合工業開発機関)がミラノ博に合わせてビジネスマッチングサービスを開始



製品・技術・サービスのPR、技術開発の促進、
ビジネスマッチングの活発化
⇒ 新製品、新技術の創出
開催国・地域を中心とした企業の取引機会の拡大

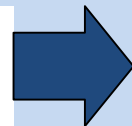
間接効果

- ・ミラノ博会場周辺の開発が進展
- ① 会場に通じる鉄道駅の設置、道路の整備、活発な民間投資



企業活動における利便性の向上
⇒ 新規企業の立地促進

- ② インターネット、各種メディアでミラノ博を発信



知名度のさらなる向上
⇒ 関連産業分野に係る拠点化、観光客の増加

「21世紀型国際博覧会」 = 世界的な課題に対し、各国が解決手法を提案し、共有する場

- ⇒ すなわち、課題解決のニーズがあって、世界のサプライヤーが国際博覧会に集まり、世界の人々が見に来るということ
- 特に開催国・地域は、展示規模が大きくなり、各国のハブ機能も担うこととなるので、もたらされる効果も大きくなる
- ⇒ 国際博覧会の趣旨から、極端な商業主義は否定されるが、企業は開催によって大きな商機を生むこととなる